

赤木は咲—Saki—の世界で麻雀を魅せる

豆腐琴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

赤木しげるが転生して咲—S a k i—の世界で何をするのかを書いていきます。

目次

プロローグ

赤木しげるは鷺巣との麻雀に負け、血を抜かれ死んでいった。そんな赤木は別の場所で目を覚ます。

赤木「ん？　ここは公園？死んだはずなのに何故だ？」

謎の声「神である私が転生させたからですよ。麻雀が主流の世界なので楽しんで下さい。」

赤木「ククク・・・そんな世界もあるのか。表で楽しめそうだと思うたのは初めてかもしれんなあ。」

神「では頑張ってください。」

これより声は聞こえなくなり、赤木は状況を確認してみた所神のおかげか戸籍もあり、まだ中学生で龍門渕学園に居ることが分かり、今度行ってみようと思った。

赤木「ククク・・・久しぶりの雀荘だ。どれだけ稼げるかな。」

この後、裏の人達の中で神域の男が帰ってきたと噂されるようになる。そんな事を気にしない赤木は倍プツシュを続け100万を儲けて雀荘を出禁にされる。

赤木「たかが倍プツシュで出禁とは弱くなったものだ。時間も朝だしこのまま家に金を置いて学校に行くか。」

赤木は金を置いて学校に行き教員室をよると教師から「君が赤木か、C組なので一緒に行って紹介するからな。」

ここで赤木挑発的な行動をとる。

赤木「別にそのまま行こうが変わらないだろ。」

教師「それはだめだ。学校のルールだからな。申し訳ないが守ってもらうぞ。」

しかし赤木素直に従う。

教師「よしお前ら席につけ。今日から新しい人がクラスメイトになる。赤木入ってこい。」

赤木「赤木しげるです。よろしく・・・。」

生徒達「赤木だつてよ。なんか近寄りづらい雰囲気出してるし関わらなくていいかな。」「なにあの子かっこよくない？後で聞いてみよう

よ。」反応は様々だったが男子と女子で反応が分かれた。

赤木まさかの放課後まで寝るといふ離れ業を初日でする。

赤木「そういえば麻雀部あつたよな。行つてみるか。」

一際目立つ綺麗な所にある麻雀部。赤木は嫌な顔で入る。

透華「あら。誰でして？男子が何の用かしら？」

赤木「なに。麻雀をうちに来たに決まつてるだろ。でも弱そうだからいいかなと思えてきたからいいわ。」

透華「調子に乗らないで頂けて？こてんぱんにして差し上げますわ。おーほっほっ」

赤木「じゃうつてみるか。」

智紀「馬鹿にされちゃ困るよ。これでもまあまあ強いんだからさ。」
純「確かにな俺も結局自信あるからそう言われちゃやるしかねえな。」

赤木の想定通りに事が進んでいく中、赤木勝ちが見えているかのようになつたらなさそうな顔になる。

赤木「何を賭ける。」

透華「もし万が一でも負けたら麻雀部の部員にしてあげましてよ。」

おーほっほっ」

赤木「足りない。全然足りない。」

透華「なつ。そこまで言うのなら、おじい様と会わせる機会をあげましてよ。」

赤木「足りないと言いたいところだがそんなもんか。じゃあやろう。」

卓に着いた時3人は赤木のオーラに心底恐怖する。何故ならそれ程のオーラを持ちながら普段は出さないで居られる事に。衣と同レベル以上である怖さに。

透華「親は私でしてよ。」

透華の親が始まる。

赤木まさかの1く9萬2。3。4萬発とまさかの聴牌。しかも

ダブルー、混一色、一通の7役と跳満確定状況。

透華まずは西をきる。智紀も西、純も西をきる。

ここで赤木まさかの1萬を引く。清一色が狙えるこの状況あえて4萬をきつていく。

全員が聴牌かと疑う中赤木この局全部ツモ切りで流局。

透華「テンパイでしてよ。」

智紀「テンパイだね。」

純「テンパイだ。」

赤木「ノーテン」

まさかの赤木テンパイしているのにノーテン宣言。この後、みんなが不思議な中で赤木1人で上がり続け、全員をとばす。

透華「あなたもつと強い人と打ちたくなくて？」

赤木「まあそうだな。」

透華「着いてきましてよ。」